

## 伝承と子どもを結ぶもの

——松谷みよ子『龍の子太郎』をめぐる——

太 田 浩 子

今の日本では、世界中の児童文学がたいへん気軽に翻訳で読めるようになってきている。読者として日本語で読める作品をかたっぱしから読んでみると、創作と翻訳のおびただしい出版物の中から、おもしろい作品、心に残る作品はなぜか翻訳の中に多い。特に登場人物がイキイキと個性的に描かれ、物語をはなれてもその立ち居振る舞い、人物像が印象に残る子どもたちは、翻訳された外国の作品の中で、より多く活躍しているように思われた。日本の創作児童文学では「子どもが個性的に描かれていない」ことがむしろ特徴である、と考えたほどである。

そんな中で、松谷みよ子が一九六〇年に発表した『龍の子太郎』の主人公は、最もイキイキと描かれ、存在感のある子どもの一人と感じられた。信州に伝わる小泉小太郎の伝説が素材として優れた作家の手になっ

伝承と子どもを結ぶもの

た時、きわめて個性的な主人公として龍の子太郎が立ち顯れたといえるかもしれない。本稿では、松谷みよ子のこの作品の構想と人物造型について検討し、文体についても多少触れてみたい。当初予定した「伝承と子どもを結ぶもの——昔話の再話と再創造」についての一般的考察は本稿に続くものとして、機会があったらまとめてみたい。さしあたって、『龍の子太郎』に焦点をあてながら、伝承と子どもを結ぶ世界に、現代にも説得力をもつ児童文学の一つのかたちを見出してみよう。

『龍の子太郎』は、信州に伝わる「小泉小太郎」の伝説をたて糸に、日本各地の昔話・伝説を織りこんで、「信州の太郎を日本の太郎に育てあげよう」という構想<sup>(1)</sup>のもとに、松谷みよ子が子どものために書いた長

編の物語である。一九六〇年に発表されて以来、子どもたちの間に今に読み継がれている、戦後の日本児童文学の代表的作品の一つといえる。

物語は、龍になった母親から生まれた元気な男の子が、様々の経験を通じて自分が何のために生きるかを自覚して、世の人々を助け、母を人間に戻すまでの「成長の物語」。龍の子太郎の人間としての「やさしさ」が物語を貫く根底に描かれている。

小泉小太郎については、柳田国男の『桃太郎の誕生』<sup>(2)</sup>にも、神の授けた「蛇の子」が水を統御する伝説の例として掲げられている。小縣郡史餘篇からの引用で、

昔、小縣郡西塩田村、前山区の鑛城山の頂上にあつた寺の住持の所へ、毎夜美しい女が通つて来る。正体を知ろうと、針に長い糸を付けて女の衣服に刺しておく、其糸は戸の節穴から出て産川の鞍淵の岩屋に入り込んでいた。女は大蛇であつて此岩屋で赤子を産み、それを鞍岩の上に置いて死んだ。大蛇の産み落した子どもは、下流の泉田村大字小泉の老婆に拾われて育てられ、其の名を小泉の小太郎と呼ばれた。小太郎は小男であつた。そうして十六になる迄、大飯を食つて遊んでばかり暮したが、十六の歳に始めて大変な力を見せた。小泉の山に登つて山中の萩を刈りつくし、それを二束にたばねて家に持帰り、決して束を解かず一本ずつ抜いて焚くように警告した。しかし老婆は束の小さいのに油断して結び綱を解いたところが、其萩は家いっばいになり、それに押し

つぶされて老婆は死んでしまった。小太郎が全部刈りとつてしまったので、今でも小泉山には萩が一本もない。そして小太郎の子孫は代々横腹に蛇の斑紋があるそうだ。(筆者要約)

という話を載せている。そして、柳田はこの話の三つの重要点の一つとして、「犀川盆地の泉小次郎と、元は一つであつたことが注意せらる」と指摘して、「松本平の方の泉小次郎も、東筑摩郡中山村、大字和泉<sup>いづみ</sup>という村で生れたと伝えられ：(中略)：父は東高梨池の白龍王、母は犀龍にして姿を恥ぢて湖水に入ると謂ひ：(中略)：この泉小太郎の大事業なるものは、母の犀龍の背に乗つて、今の三清地<sup>さんせいぢ</sup>と水内橋<sup>みのちばし</sup>の岩山を突き破り、水の路を越後の海まで切り開いたことであつた。」という伝説を紹介している。

松谷みよ子は、長野県を民話採訪の旅で歩くうちに、小県郡中塩田で「野放図な男の子」小泉小太郎の話に出会つた。信州の村々で聞く伝説と昔話のいりまじつたような話は、楽しい話よりは悲しい耐える話が多く、松谷は「耐えることを越える」話を求めていた。塩田の「食っちゃ寝の小太郎」は萩刈りに力を見せただけで話が途切れたが、さらに続く旅の中で、松本平の犀龍の背に乗つて山を切り拓く泉小太郎の話聞いた松谷は、「暗く、耐えつづけてきた水との闘いの民話で、ここで明るく前向きにばあつと開けた思いがした」という。そして、断片化した信州各地の小太郎を、桃太郎、つぶ太郎、寝太郎……をも越える太郎にし

て、新しい民話の主人公として日本の子どもの中によみがえらせたい、  
そうしなければいけないという強い内面の思いにゆり動かされた、<sup>(4)</sup>とい  
う。

もともと書かれたものではなく、人々によって土地土地に語り継がれ  
た昔話や伝説は、話し手の地方によって、時代によって、人によって力  
をいれて話す部分が一樣でなく、断片化するのがふつうであった。作家  
として民衆の知恵にじかに触れたい思いで土地土地のおじいさんおばあ  
さんの話に耳を傾け傾け、民話採集の旅を続けていた松谷には、断片に  
なった話を聞きながら、それをつづりあわせて新しい太郎像を造りあげ  
たい意欲につき動かされた。松谷にひき渡された物語は、信州が海だっ  
た、あるいは塩水湖だった気も遠くなるほどはるか昔の記憶を語り継い  
できた「祖先からのおくりもの」と感じられた、<sup>(5)</sup>という。

『龍の子太郎』に巧みに織りこまれた伝説・昔話は、たて糸となった  
信州の小太郎の話の他にも、作者自身の信州、秋田、和歌山等の探訪の  
旅の中から直接に得られたものが多い。断片的なものもまとまったもの  
も、具体的なものも一般的なものも見ることができるが、作品の中から  
拾い出してみると、

- 一、水晶のような母親龍の目玉をしゃぶって乳がわりに育つ子
- 一、体にうろこの形のあざのある子
- 一、動物の力を借りて難事業を達成する英雄

#### 伝承と子どもを結ぶもの

一、天狗に力を授けて悪い者を退治する英雄

一、男の子の成長を助ける賢い女の子、そして二人の婚礼

一、成長した子どもの力を借りて人間の姿に戻る母親

一、水の源をおさえて人身御供を要求する悪い鬼

一、いりまめの食いくらべ

一、変身の呪文

一、一日百里走る小馬

一、母のかたみのくし

一、にわとり長者の欲ばり婆さま

一、まっ白な顔の雪女に道を迷わされる話

一、遠くのできごとが何でも見える鏡

一、三匹のイワナを一人で食べた者は龍になる

等々である。

これらの伝承の数々は、作者によって一つの物語世界の創造にいわば  
モニタージュの手法によって巧みに利用されている。挿入の一つ一つ  
が、現実にはありえないファンタジーの世界の实在感を強化して、話の  
筋の運びを滑かにし、主人公はじめ登場する人々の人物造型に役立っ  
ている。ともすると継ぎはぎだらけになりかねない断片の集積を一つの物  
語世界にまとめあげているのは作者の手腕だが、特に主人公の造型に作  
者の熱意と創意を集中していること、独特の文体を作り出しているこ

と、が成功して、長編の緊密な物語が成立している、といえるであろう。

次に『龍の子太郎』について、ストーリーの展開と、主人公の成長が不可分に結びついていることに注目するために、以下に物語の要約を試みてみよう。<sup>(6)</sup> 「」の中の「英雄……」というのは、成長の節目を示すために筆者が書き入れた。英雄ということばは、主人公の成長を多少一般化するために用いた語で、主人公、ヒーローという以上の意味はない。

龍の子太郎は、のんきにはあさまに作ってもらった団子を食べ食べ、山のけものたちを友だちに、すもうをとったりあやの笛を聞いたり、子どもの頃を楽しく過していた。「英雄の蓄積の時代」 ある日はあさまから、自分の生まれの秘密——身重の体で村人たちと山仕事に出た母親は、大雷雨とともにその姿を龍にかえてしまい、山の沼にこもってしまった。数か月後川上からばあさまのところの流れついた赤ん坊は、母親の半てんにくるまり、体にうろこのあざがあった。赤ん坊を育てたばあさまは、ある日北の湖に移り住むという龍が「大きくなった龍の子太郎が、強くかしくなかって迎えに来てくれたら……」という声を聞く——を聞いた龍の子太郎は、母の生きていることを確信して会いに行く決心

をする。その時、友だちのあやが鬼にさらわれたと聞いて、直ちに助け出しに行こうとする。「英雄の旅立ち」

すぐに鬼の所に直行しようとする龍の子太郎に、動物たちは天狗の力を借りることを知恵づける。天狗とのすもうに力を見せて、天狗から力を授けられる。「英雄の力の獲得」 あやをさらった赤鬼を退治して、さらにあやを赤鬼からとりあげた黒鬼をも退治する。「英雄の力だめし」 めでたくあやを助け出した龍の子太郎は、水の源をおさえて人身御供を年毎に要求する黒鬼が減びたことを喜ぶ村の人々から感謝のごちそうを受ける。この村の田畑の広さ、豊富な食べものに驚嘆した龍の子太郎は、ひるがえって我が生いたちの山の村の貧しさ、人々の苦しさに思いをはせる。「英雄、現実世界を認識し始める」

あやを村に帰して一人母を訪ねる旅を続ける龍の子太郎。広く荒れ果てたにわとり長者の家に住み込みその田を一人で耕し耕し、田植を行ない、ついに刈りいれの時を迎える。裏の池にいるかと期待した龍はあらわれず、欲ばり婆のもとから、刈り取った千人刈りの稲を一束にしてかついで遁走。「英雄の労働体験、そしてその報酬」 稲束を背負って、北の湖めぐして山を越え越え行く途中、狭い山あい山かげに細々と貧しく住む人々は、龍の子太郎が龍に会いに行くというのを聞いてびっぴり。龍の子太郎が背負った稲を分け与えると、初めて目にする稲にまたびっぴり。稲を分けあって田植えをしようとする人々の話に、広い土地

があったら……、山を投げとばして広い土地をつくる力が自分にあったら……という夢とともに、皆の役に立ちたい、という熱い思いが龍の子太郎の胸中に広がる。「英雄が他人の願いを感知する、あるいは行動の動機の内的成熟」

母に会いたい一心で山を越え、不思議な山婆の手引きで最後の山越えを試みる。山犬、大蜘蛛の試練を乗りこえた時雪が降り始め、白い雪女たちに囲まれた龍の子太郎は雪の中に埋れてしまう。「英雄の危機」  
翌朝、遠くのできごとが何でも見える鏡で龍の子太郎の行動を熱い思いで見ているあやが、空飛ぶ馬に乗ってかけつけ、雪の中から龍の子太郎を掘り出す。「英雄の前に、幼な友だちの賢い女の子が命の恩人として、あるいはパートナーとして再出現」

空飛ぶ馬に乗った龍の子太郎とあやは、大きな湖の上に向かって来る。そして山のかなたにどこまでも続く海を見つけて、湖を囲む山の一つを崩せば湖の水が海に流れて、あとにたいらな広い土地ができることに気がつく。「英雄の事業計画」 広い湖に下りて母龍を呼ぶども応答なし。鯉が湖の底に横たわるめくら龍に龍の子太郎の持つくしをとりつぎ、ついに龍は姿をあらわす。「英雄ついに母親と対面」  
龍の子太郎はばあさまとおかあさんと一緒に暮らすことを誓い、母になぜ龍になったか聞く。身重の体で山仕事に出た時いわなを三匹食べてしまっ、三匹のいわなを食べたものは龍になる、という山のおきてのた

めに龍になってしまったこと、自分のことしか考えることのできなかつた者は人間でいられなくなってしまったことを話す母龍。それを聞いて龍の子太郎は、もしその時、いわなが百匹あったら、米のにぎりめしが百個あったら……といわな三匹を食べたことで自分を責めることなど必要のない広い土地を夢見て、山の貧しい暮らしを思い出す。そして、自分の願い——湖の水を海に流して広い田をつくって、山の人たちを呼びよせたい、と母龍に話す。「英雄の「願い」の確認、生きる目的の自覚」  
旅を続けて会いに来た息子の願いを聞いた母龍は、じっと考え続けて、自分になくはない湖を放棄して龍の子太郎の願いに力を貸すことを決心、龍の体を山にぶつけて山を切り拓くことを提案する。あやも山のけものたちも力を貸しに集まって来た。「英雄の計画実行、そして協力者たち」

首に龍の子太郎を乗せて目が見えない母龍は必死に山に体あたり、雷の弟子になった赤鬼も助けにやって来て、ついに山を切り拓くことに成功。新しい川は海へ流れ、湖の底から広い肥えた土地が出現する。抱きついて喜ぶ龍の子太郎の涙が母龍の目にかかった時、龍はみるまに人間の母親の姿にかわった。「英雄の計画の完成、願いの実現」 龍の子太郎とあやは結婚、ばあさまはじめ村の人たちを呼び集め、広々とした土地にしあわせに暮したとのこと。「めでたしめでたし」

龍の子太郎の性格で何より際だっているのは、その「やさしさ」であろう。人間的なやさしさ、あるいは柔らかく開かれた心が、龍の子太郎のすべての行動の基本にある。山の動物たちと遊びまわる幼い日々、団子をいつも動物たちに分けてやり、動物に相撲を教えてやり、踏みつぶしたネズミの小さな土俵をそっと直してやり、いのししの子どもたちを心づかう、龍の子太郎のやさしさ、あるいは小さいものへの共感は、幼い日々<sup>(7)</sup>に別れを告げて、いわば青年期の試練に立ちむかう旅に出た後も、「やさしさ」そのものとして次第に成長していく。生来に備わったやさしさが、ストーリーの展開とともに、つまり主人公の成長の過程で様々なかたちで開示されていく、といってもいいのかもしれない。

広い土地を見ては、自分の育った村の貧しさやばあさまの苦勞を思ったり、背負った稲の束を山あいの人たちに分けてやったりする龍の子太郎のやさしさは、行動を重ねる度に次の目標を見出し、当面の問題を解決しながらより大きくて次元の高い問題を見出していく。成長の過程の根底に、つねに一種の行動原理としてやさしさが貫かれている。

山あいの貧しい人々の生活を目のあたりにして、  
「ああ、おら、でっかくなりてえ。山よりもでっかくなりてえ。そうすりゃ、こんな山、どしどし海の中へなげとばして、ひろいひろい土地をつくるに。そして、そこへ、見わたすかぎり、米をつくるだに！」<sup>(7)</sup>  
と夢のように人々の願いを感知することから、次第に内なる思いは成熟

していく。龍になった母から、母が龍の子太郎を身ごもっていた時、三匹のイワナを食べたために山のおきてを破ったことになり、龍になったことを聞くと、内なるその思いははっきりした形をとって自覚されてくる。

「：いままで、くっちゃね、くっちゃねするばかりだったども、やっといま、じぶんがなんのために生きているのかわかった……。おかあさん、おねがいだ。このみずうみをおらにくろ。おら、山をきりひらいて水をながし、ここに、見わたすかぎりのたんぼをつくって、山の人たちをよびあつめたい。そして、みんなが、はらいっぱいいくえるくらしをつくりたい。せば、もうおかあさんのようになんか思ひをする人はいなくなるんだ。」<sup>(8)</sup>

人々の願いが自分の目標と自覚され、自分を投げ出しても皆の役に立つようなことをやりたい思いがつのつてくると、母龍はじめ、あやや動物たちの共感と助力を得ることさえ可能になってくる。最後には、母龍の自己犠牲的な力の發揮で、山を切り崩す難事業を達成。その捨身の献身によって、母龍も再び人間の姿に戻ることになる。

本来、伝承の世界の主人公は、単純な原型として、あるいは抽象的な類型として語り伝えられることが多い。例えば「気はやさしくて力持ち」と一言語ることで、細かい説明なしにその性格が了解されるようなものであった。しかし、龍の子太郎は、もはや伝承の世界の主人公では

ない。作者が伝承世界により添いながら、自身の自由な創意をめぐらし、造型した主人公である。「食っちゃ寝の小太郎」を「龍の子太郎」に育てあげる際に、作者は、類型的・原型的であるよりは、個性的な人物を描いて現代に生きる主人公にしようとした。

「民話を書く」際にその視点がどこにあるか、を重視する作者は、小さな自分の視点で原話を斬ることを戒めて、手を動かしからだを動かしてもものを作る人たちの身体を漣して滴り落ちたようなどろどろしたものの中に自分の視点をくぐらせて、一緒に呼吸する、その上で、自分が語るならこう語りたい、という作業が必要である、<sup>(9)</sup>という。原話とのめぐりあい何より大切である、としながらも、それを選択する立場、視点として、生産者の立場に立つことが大切であると考える作者の思いを通して、いわば「耕す人々の理想」「農民の英雄」が、龍の子太郎の姿になってあらわれてきた、といえなくもない。作者は、民衆の間に語り伝えられてきた話の生命をうまく掴みえた、人々の希望、願望をより大きく広がる形でとらえ得た、ともいえよう。そして、物語の背景から飛び出して、イキイキと立ち動いて自ら物語を展開していく、存在感のある人物が生み出された。

児童文学が「理想主義の文学」「人間の素朴な欲求にもとづく文学」と考えられるなら、<sup>(10)</sup>造型された龍の子太郎は、まことに明るく、楽天的に右の要件を満す主人公である、といえよう。比較的単純に、直線的に

展開する物語の中で、主人公が次々に経験することがらと、経験を通じて次第に強く賢くなっていく主人公の様子は、文字を読み始めてあまり時を経ない、長い物語を初めて読む年頃の子どもたち（講談社発行の本のカバーには、「小学中級から」と印刷されている）に、自己同情的な気分を味わわせ、満足と快感を与えるのではないだろうか。深刻でない、ほほえましい困難克服型のヒーローは、子どもたちの単純な生命力の拡張と成長への願いに合致するものであろう。

口から耳へ、口伝えに語り継がれたものがたりは、「むかしむかしあるところに」というようなきままつたことばで始まって、話の内容は時間や場所を限定しないで、人物や行為を単純に象徴的、原型的に語る「昔話」、特定の土地、特定の時代、特定の人物と結びついて、あの山、あの寺の由来や言いつたえを語る「伝説」などに分けて考えられることが多い。他に古代に体系化された「神話」や、人々の日常的体験を語る「世間話」などを含めて、口承文芸とか民間伝承、民間説話などと総称することもあるし、「民話」ということばが使われることもある。いずれにしても、口から耳への「伝承」は、文字に書かれた文芸とは自ずから違った世界を形づくっていた。

もともと語り継がれた昔話や伝説には、それぞれに独自の語彙や文体（かたくりくち）がある。話を伝える地方の方言とともに、独特の「語り」

が、昔話を昔話に伝説を伝説にしあげる、いわば本質である。時代が変り、いろいろがなくなった生活の中でも、あるいは共通語が全国に行きわたっている現代の生活の中でも、昔話は口から耳へ語られることによって、真に生きたことばになり、生きた話になる、ともいえる。

しかし、研究のために正確な記録を試みる場合であれ、広く多くの人に伝えるためにことばを純化して文学的密度を高めようとする場合であれ、伝承を書く、つまり語り伝えられたものを文字にする、という作業も、今日では不可欠のものである。

松谷みよ子は、作家としての主体をかけて、この「伝承を書く」仕事にとりくんできた。松谷にとっては「民話」を書く、「民話」とのとりくみは、自身が山を越えて人々の中に話を聞きに歩くことから始まり、「その中ではじめて語りを聞くことの楽しさ、語りの中にこめられる人々の心、祖先とのめぐりあいをからだで感じる<sup>(11)</sup>ことができた。」そして、自身もまた「語り手」であることを自覚していった、という。つまり、はじめから「語り」としてとらえられた伝承を、自身が語り手として書いていく、そこに松谷の「民話を再話する」立場がすっかり自覚されていた。

松谷は、従来軽くみられがちであった伝説や世間話を、そこにこそ民衆の切実な感情が語り込められていると考え、昔話とひっくりかえり「民話」と呼ぶ。そして民話と呼ぶからには、祖先から受けとったものをた

だ大切に保存するだけでなく、そこに新しく生み出されてゆくものを加え、発展させていかなければならない、と考える<sup>(12)</sup>。

伝統と創造の課題を見据えて、だから、先に言及した「視点」ということを重視していた。同時に、「語り」を生かす文体にも注意を払ってきた。『信濃の民話』『秋田の民話』といういわゆる「再話」の仕事と前後してつくられた『龍の子太郎』にも、語りの文体は存分に生かされている。

実際に人々の語りの中から聞きとって来たものなのか、松谷自身がつくり出したことばなのか、擬音、擬態のことば使いの豊富さ、巧みさは、本を讀んで、いても耳に残るような気がするほどである。

「谷川がゴボゴボと音をたてて」「せっせせせと働いて」「東の風よふいと吹け」「トントカトントカ スットントン」「鬼」にかにか笑い」「山じゅうがびりびりするようなでっかい声」「しんとして聞きほれる」「ささの葉がざわざわなる」「さいきい声」「おうおうわめく」「ちろちろもえる」「沼の水」がぱっとわれて」「ごんごんせきをする」「すもう」えっちゃえっちゃと始める」「しこ」デンデンとふむ「太郎」、ドシンドシンとふむ「いのしし」、トントンとふむ「うなぎ」ポチンポチンとふむ「ねずみ」「どうと風が吹きわたる」「さわっ、ざわっと枯れ葉がはきよせられ」「ごうとと羽音」「でんかしょうでんかしょう」「えいや えいやともみあい」「ゆるゆると酒をのみかわ



し」「まんまんと酒をつぐ」「かっかとはてって、みきみきと力がわいてくる」「[「きのこ」むずらむずらとはえる]」「どしどし どしどしあるいて」「トントコ トントコ テケテケテン」「すっぽんすっぽん輪切りに」「ちよろりと顔を出す」「ズシーンズシーンと地ひびき」「岩がびりびりとゆれ」「炭のような目をかっかともやす」「ドーン ドドーン」「えんさど がったらやあ」「気がぬけてえへら」「くるりと立って、ふうっと大息」「カッカッというひずめの音」「夕日がのんのんと岩山のかげにおち」「しらしらとあたりが明るく」「くわらっとけしきがかわる」「ぐるうっと、ぐるうっとまわって」「しゃんしゃん 鉄びんのお湯」「ほくほく ほくほく湯気のため」「ぼろりうりぼろりうり」「おうおう声をあげて泣く」「えっちゃえっちゃかつきあげて」「ピタピタと水音」「きんきら声」「グーウ、グーウといびき」「沼はとろりとゆれて」「[「へび」シューシュー音をたてて]」「つぶりとしずむ」「どんすこ どんすこ」「ぶうぶう うまそうな湯気」「つぶつぶと[「日が」くれる]」「すぽうんと」「びちびちじゅくじゅくとおしあいへしあい」「ピシャッと水をうって」「かっかとはてって」「ぼろぼろと泣く」など、数えあげたらきりがなし。

「一つぶは千つぶになあれ 二つぶは万つぶになあれ」「龍の子 龍の子 まものの子」「東の風よ ぶいとふけ／西の風よ ぶいとふけ」「つんぶくかんぶく つんぶくかんぶく」「でんでらでんの でんでら

でん／でんでらでんの でっかいおにのおへそは／二百十日の それ風あなだ」「むすびだ むすびだ／ほい ごまのむすび／ほい みそのむすび／ほい うめぼしのむすびにやきむすび／むすびだ むすびだ／ほい ほい」「このみそしる 二十ぱい／大きなむすびが八十八」「えんやらやあのやあ まかせのしよい／えんやらやあのやあ まかせのしよい」「上みれば虫っこ 中みれば綿っこ 下みれば雪っこ」「たいこのすきな赤おにだ／トントカ トントカ トントカ／めしよりすきなたいこだよ／トントカ トントカ／スットントン」のような、かけ声やはやしことば、うたなども含めて、物語の中には、あたかも「音の世界」が隠されているようなものだ。

また、「いそぎにいそいでいくがいくと」「おおいがぶさってくる雪女のかおをはねのけはねのけ」「ごくごくごく、のみにのみつづけたい」「びょんびょんくぐりぬけ、くぐりぬけて」「一かい、二かい、三かい、五かい、十かいも投げとばされて」というふうにあらわされた、たたみかけるような語りくちも、リズムを感じさせる。

なお、松谷みよ子の「民話的発想による長い物語」<sup>(13)</sup>には、他に『まえがみ太郎』（一九六五）『ちびっこ太郎』（一九七〇）がある。いずれも自家薬籠中のものにした伝承をつづりあわせて新しい「民話」の世界を現出しているが、主人公像を特別に際立たせることはできなかった。

まえがみ太郎はお正月さまの申し子、ちびっこ太郎はちょっと足りない正直者の三男坊という、いわば民話的類型の人物である。そして彼らの成功もいわば他力による幸運の結果であることが、主人公の人間像という点で弱くならざるを得なかった。『龍の子太郎』に描かれたような人間の成長を描く物語は、日本の伝承の世界にはあまり多くないのかもしれない<sup>(14)</sup>。むしろ類型を出たところに、作者の自由な創意が集中して、龍の子太郎という魅力のある人物がつくりあげられたのである。

実際、龍の子太郎ほどイキイキと個性的に、躍動感と実在感をもって描かれた児童文学の主人公は少ないのではないか。作者の執筆の動機に大きく働いた「太郎を日本の主人公にしたい」という思いは、読者である子どもたちに素直に届いているであろう。そして翻訳を通して世界の子どもたちにも受けいれられる普遍性を備えているともいえるのではないだろうか。実際にこの作品は一九六二年の「国際アンデルセン賞優良賞」を受賞しているし、ドイツ語、ロシア語、英語の翻訳も出版されているという。

作者は『龍の子太郎』を「祖先との合作」「子どもとの合作<sup>(15)</sup>」という。作者として創作の過程をふりかえった時に、そういう実感と感慨があったのであろう。私は読者として初めて『龍の子太郎』を読んだ時、創作の主人公龍の子太郎が「伝承と子どもを結ぶもの」として確かに存在していることに感動した。伝統に深く根ざしながら、日々新しく子どもに

働きかける力をもつ『龍の子太郎』に、日本の児童文学の一つのかたちを見たのであった。

注

- (1) 松谷みよ子『民話の世界』講談社現代新書 一九七四年。三六一―六五頁。
- (2) 定本柳田国男集 第八卷(新装版) 筑摩書房 一九六九年。
- (3) 同右 一三四―一三六頁。
- (4) 松谷 前掲書 三六一―四〇頁。
- (5) 同右 四三―四八頁。
- (6) テクストは、松谷みよ子『龍の子太郎』講談社 一九七九年新装第一刷。
- (7) テクスト 一四九頁。
- (8) 同右 一八八頁。
- (9) 松谷 前掲書 一四六一―一四八頁。
- (10) 神宮輝夫『児童文学の中の子ども』NHKブックス 一九七四年。
- (11) 松谷 前掲書 一六頁。
- (12) 同右 五六頁。
- (13) 同右 六五頁。
- (14) 小澤俊夫『昔ばなしとは何か』大和書房 一九八三年。著者は、ヨーロッパと日本の昔ばなしの主人公像を比べながら、ヨーロッパの昔ばなしには、ストーリーの構成が人生の齣を進めて一步一步登っていくような人間の成長、自己形成を語る話——マックス・リュティのいう「上向きの履歴書」——が多いが、日本には履歴書になっていない「一夜の体験」という構造をもつ話の方が多いことを指摘している。(一二五―一三三頁。)
- (15) 松谷 前掲書 六三頁。

〔前比較文化研究所員 一九七九―八二年度総合研究一〕

(子どもの社会化過程に関する比較文化的研究) 研究員)